Journal of Osaka Kawasaki
Rehabilitation University Vol.*9*.No.*1*.*2014*
pp.*49-54*

報　告

ハワイ研修

The Hawaii field work

髙倉　利恵

要　約：文部科学省の報告によると、留学する学生が年々下降傾向にあるという。このような状況下、本学が毎年のように、教育活動の一環として、海外研修の支援をしていることは、すばらしいことであり、誇らしいことである。本学の建学精神の一つである、「夢」を持つことは、外を見ることで更に感性が刺激され大きく育つのではなかろうか。平成 25 年度の海外研修には、理学療法学専攻 4 回生、6 人の学生達が、7 泊 9 日の日程で、ハワイ州オワフ島にて海外研修に参加した。研修内容は、臨床が中心であり、学生は日本にいては経験できないことを体験し、気心のしれた友人同士、寝食を共にし、大学生活最後の夏休みを思う存分楽しんでいた。

キーワード：海外研修、臨床研修、ホノルル

はじめに

2010 年の文部科学省の報告によると、日本人の海外留学者数は、2004 年の 82,945 人をピークに年々下降傾向にあり、2008 年は 66,833 人までに減少した。この数は 2007 年に比べると 11％減であり、日本人学生の海外留学離れを象徴しているように見える。留学先の国は、１位アメリカ合衆国（29,264 人）、２位中国（16,733 人）、３位イギリス（4,465 人）であった[1)]。アメリカ合衆国への留学生数の推移を見ると、他のアジア地域からの留学生が急増しているにも関わらず、日本からの留学生は年々減少傾向にある[2)]。このような海外留学者数の減少傾向を、OECD（経済協力開発機構）は、日本人学生の「内向き志向」の現れであると指摘している[3)]。情報通信技術の急速な発展に伴うグローバル化が進む中、外国の情報や物が以前に比べはるかに取得しやすくなったこと、日本の「国際化」が一世代前に比べると遥かに進んでいること等から、日本の学生達が外国に出かけることなく外国を疑似体験できる環境におかれていることも反映しているように思われる[4)]。実際に知らないところへ出かけていき、異文化の中で生活し、そこで暮らす人たちと触れあうという体験は、普段の生活からは得られない新しい世界へ目を向けてくれる。そこには、したことのない「体験」への、驚異や感動、あるいは違和感があるだろう。「感動」は、人間の知識欲や行動意欲を刺激するものであり、進歩前進の推進力となる。感動を得ることは、メディア等を通した疑似体験学習からでは困難であり、実際の体験学習でこそ可能なことである。

今回の海外研修の研修目的の一つは、先進国のリハビリテーション施設と臨床現場の見学で

Rie Takakura
大阪河崎リハビリテーション大学
リハビリテーション学部　理学療法学専攻
E-mail：takakurar@kawasakigakuen.ac.jp

あった。医療人を育てるリハビリテーション専門大学である本学では、医療の知識や技術取得はもちろんのこと、コミュニケーション能力の育成も教育のコアな部分である。本来の意味でのコミュニケーションのあり方を学び、体験することは、日本語が通じない外国に行ってこそ経験できることでもある。リハビリテーション先進国アメリカにおいて臨床現場の見学をすることは、大きな刺激であり、新しい発見に出会え、また疑問も芽生え、リハビリテーションを多面的に見る能力を養うきっかけにもなる。このような点から、本学が、本学の教育活動の一環として海外研修の支援をしていることに誇りを感じる。

オワフ島のバス乗り体験

本学の実施した海外研修場所は、アメリカ合衆国ハワイ州のオワフ島であった。オアフ島は、世界でもトップクラスに入る有名な観光地であり、穏やかな気候に加え、色彩豊かな自然、長い時間を経て受け継がれている歴史と文化をもつ場所である。東京都とほぼ同面積のオアフ島での移動手段は、自家用車中心の広大なアメリカ本土とは、大きな違いがある。オアフ島内での移動手段は、アメリカ本土同様自動車中心なのだが、バスが公共交通手段の重要な位置を占めている。オアフ島内には、バス路線がくまなく張り巡らされていて、１乗車２ドル50セントという、とても経済的な価格でほとんどの場所へ行くことができる。これに加え、ホノルル市内や近郊への観光地へ、旅行社等が無料バスを走らせてもいる。更に、オアフ島南岸を東西に結ぶモノレールの建設も始まっていて、将来、交通の便がよりよくなるようである。バスを待つより歩いた方が早いと、地図を片手に、歩いて市内観光をする学生もいたが、このバスを利用しての移動は、多くの事を学ぶ機会を学生に与えてくれた。まず、学生たちは、目的地に応じてバスの路線図を調べなければならなかった。常に「学生の友」である、「スマホ」に頼る事は外国では難しく、観光案内所に問い合わせたり、ホテルのフロントで聞いたりしなければならない。路線によっては、バスの乗り換えも必要となり、何番のバスに乗り、何番のバスに乗り換えるという下調べは、楽しい事でもある。実際の行動に移す時は、「本当に目的地へ行くのだろうか」「下車する停留所を間違えはしないだろうか」等という不安もあり、手に汗を握ったことでしょう。バスに乗るためには、乗車時に運賃２ドル50セントを支払わなければならないが、日本のバスのようにつりは出ないので、小銭の準備が必要である。コインを持ち歩くのが面倒な学生は二人一組になり５ドル払うという事もできるが、それを運転手に告げなければならない。そして、「トランスファープリーズ」と、運転手に言わないと乗り継ぎ用の切符がもらえないことからも、バス移動は、学生達に有無を言わせず異国文化を体験させた。

2013年大阪河﨑リハビリテーション大学ハワイ研修スケジュール

ハワイ研修は７泊９日のスケジュールで施行された（**表１**）。

表１　2013年大阪河﨑リハビリテーション大学ハワイ研修スケジュール表

	日程	訪問場所等	内容
1	9/11 水	ホノルル国際空港着 10：00	観光案内所訪問
2	9/12 木	ハワイ ヒーリング アートカレッジ、ハワイ大学	マッサージ体験、公式バレーボール試合の観戦
3	9/13 金	フクジ＆ラム PT クリニック	臨床見学：外来、労災クリニック、プール
4	9/14 土	ホノルル市内	自由行動：ダイアモンドヘッドハイキング等
5	9/15 日	ホノルル市内	自由行動：ファーマーズマーケット等
6	9/16 月	パシフィック リハビリテーション病院	臨床見学：PT, OT, ST
7	9/17 火	パシフィック リハビリテーション病院	臨床見学：PT, OT, ST
8	9/18 水	アラモアナホテル発 9:30	
9	9/19 木	関空着 18：25	

ハワイに到着して、最初にしたことは、旅の疲れを癒すことも兼ね、カイルア市にあるハワイ ヒーリング アート カレッジ でマッサージ施術の体験である。この学校は、学生が教室でマッサージについての学習をすることと同時に、臨床で実際施術を行うことで単位を取得出来るようになっている。オーナーに学校を案内して頂き、マッサージラボ室に入った時、学生達からは驚きの声が上った。それは、施術中の姿勢を確かめられるよう、部屋の壁に鏡が張り巡らされていたからである。姿勢がいかに大切であるかは、動きを学び教えることの基本であり、フィードバックを得るための鏡の使用は見習うべきことだと実感した。同日の夕方ホノルルに戻り、ハワイ大学キャンパスにあるスタジアムで、全米でもトップクラスに位置する女子バレーボールの試合を観戦した。

臨床研修

海外研修のメインである臨床研修は、研修第3日目から始まった。内容は、Fukuji & Lum Physical Therapy Associate（以下フクジ＆ラムＰＴクリニック）と、Rehabilitation Hospital of Pacific（以下、パシフィック リハビリテーション病院）での臨床見学、体験、ミニレクチャー等であった。アメリカのセラピーシステムにおいて、日本と違う部分は、ハワイ州認定資格を持ったセラピストアシスタントがセラピストの補助をする事である。例えば、理学療法士がある対象者を評価し、その評価結果に基づき理学療法士の指示のもとに、理学療法士アシスタントが治療介入を行うというシステムである。

図１　ミニレクチャーとディスカッション

パシフィック リハビリテーション病院での体験

パシフィック リハビリテーション病院では、それぞれの学生が二日間、病棟そして、外来で働く理学療法士、作業療法士、言語療法士のいずれかに付き従い、実際の患者にどのようなセラピーを行っているのかを見学した。このリハビリテーション病院は、ハワイ唯一のリハビリテーション専門の病院であり、リハビリテーション病院の入院基準に則した対象者のみがリハビリテーションプログラムに参加できるようになっている。入院するための必要条件の一つに、「1日3時間のリハビリテーションを週5日行うことができる」があり、それに耐えられない対象者の入院はできないことになっている。毎週行われるチームコンフェレンスにおいて、リハビリテーションによって、ひとりひとりの入院患者にどのような機能的変化が起こっているのかが検証される。このことは、リハビリテーション対象者ひとりひとりに応じた、機能的なゴール設定がなされることを意味している。機能的なゴールとは、例えば、「対象者は、歩行器を使って現在、5mしか歩けないが、３週間で10m歩く事ができる」とか、「対象者は、現在起居動作をするのに全介助を必要とするが、６週間で軽度介助で行えるようになる」等がある。このように、リハビリテーションをした結果がどうなるのかを目に見える形で提示し、機能向上がなされているということを、具体的・客観的に示されなければ、プログラムは停止される。単に「可動域や筋力が向上した」ではなく、

その結果「どのような生活機能が向上したのか」を示す必要性がある。例えば、「上着の着替え自立」というゴール設定のもと、着替えができない理由の一つである「肩の可動域制限」を治療した結果、上着の着替え自立が可能となった、というような流れである。機能的な結果が出ない対象者には、健康保健の適用が非常に困難となり、リハビリテーションの継続が不可能となるのが現状である。

このような厳しい保険制度の環境の中で、セラピスト達がどのようにリハビリテーションを進めているのかは、とても興味深い所であった。学生達が一番興味を持った部分は、リハビリテーション室において、マット上に対象者が誰一人として寝転んでいなかったこと（誰も他動運動をしていなかった）。そして、対象者を動かす、セラピスト達の移乗テクニックの凄さであった。米国では、理学療法士の多くが女性であり、特にハワイ州ではアジア系の小柄な女性セラピストが多い。その小柄な彼女達が、実にスムーズに、力まず、自分より大きな対象者を軽々と動かす光景を目の当たりにし驚いたというのが学生達の感想であった。セラピスト達は学生達に対してとてもフレンドリーであり、平行棒内でのバランス練習で風船を対象者に投げる役目を学生に与え、セラピーに参加させる場面も見られた。対象者の中には日本語しか話せない人もいて、学生が日本語を話せると知り、会話を楽しむ場面も見られた。昼食は、パシフィックリハビリテーション病院のカフェテリアで、病院職員と一緒に摂った。

学生達は、パシフィック リハビリテーション病院の外来において、珍しいエクササイズマシン、Anti-gravity treadmill に試乗をさせて頂いた。このエクササイズマシンは、対象者の体重を最高 20％まで軽くすることができ、下肢の関節にかかる負担を実質的に減らすことが出きる。このことから、体重による膝の痛みで歩行に制限が加えられている対象者等に、痛みを感じさせずに歩行を教えることができる。Anti-gravity treadmill を使えば、筋力が弱くて立つことが難しい対象者でも、立位を保持したまま歩行訓練を行うことができ、また何十年も走った経験がない高齢者を走らせることが出来るという説明を受けた。学生達の試乗した感想は、「体重が軽くなった時の膝への負担の軽減」と「体重が戻った時の膝への負担」の大きなギャップは言葉にならない、との事だった。

図２　Anti-gravity treadmill の試乗

フクジ＆ラムＰＴクリニックでの体験

もう１つの臨床研修場所は、フクジ＆ラムPT 外来クリニックであった。フクジ＆ラムＰＴクリニックは、二人の理学療法士が経営者で、ホノルル市、カネオへ市、カイルア市の３カ所で外来クリニックを運営している。見学をさせて頂いたカネオへ市のクリニックには、３施設あり、１つが、一般外来、もう１つが労災専門外来、３つめが、水中治療を行うプール外来であった。一般外来においては、膝人工関節術後のリハビリテーション、頸椎と肩にしびれを訴える対象者の初期評価の見学等、一般的な整形外科疾患をもつ対象者の評価と治療を見学させて頂いた。労災外来クリニックでは、労働災害の被保険者を対象に特別なプログラムを組み、職場復帰をゴールにしたリハビリテーションが

行われていた。学生達は、対象者と一緒に、特別エクササイズプログラムを体験した。プール外来では、荷重制限がある対象者へのリハビリテーション、認知症を持つ対象者の水中リハビリテーションが行われていた。特に認知症を持つ対象者の運動は、通常の環境では難しく、環境制限ができる水中での方が歩行等の動きの促進やエクササイズが安全かつ容易に出来るという説明であった。アルツハイマーを呈する80歳代女性対象者が、セラピストに両手を介助され、プールでの歩行練習に無心で取り組んでいる様、それをプールサイドで見守る家族の姿が印象的であった。

図３　コアーエクササイズ

図４　バランスボールエクササイズ

まとめ

今回の研修を大きく分けると、受動的な「見学」「ミニレクチャー」と、能動的な「体験」「探検」に分けられる。特に後者は、海外研修の醍醐味であり、学生達は 臨床研修の合間を少しも無駄に過ごすこと無く、忙しく動き回っていた。その代表的な一つに、学生自ら発案、計画をした海辺でのバーベキューがあった。学生達は食材と道具を手分けして揃え、火を炊き、波音を聞きながら仲間と食事をし、そして、後片付けという一連の企画を実行した。あるグループは、バスを使って登山口まで行き、早朝山登りを満喫した。このように、多くの感動を「体験」と「探検」から得た。しかし、その一方で、学生達は、日本語を使えないコミュニケーションの難しさも実感した。言いたい事が伝わらず、聞きたい事が聞けない、という体験は、今後、このような対象者が沢山いるリハビリテーションでの臨床を学んでいく過程において、何ものにも代え難い貴重な体験であったように思う。

図５　アラモアナパークにてバーベキューを楽しむ

今回の海外研修は、７泊９日という短期留学とは言えそうにない短い期間ではあったが、一般的に言われる短期留学の目的「普段できない体験をする」という目的は十分に達成出来たと思われる。 リハビリテーション先進国の動向を実際に体験することは、今まで学習したことを、改めて振り返る機会を与えてくれた。学内や日本の臨床で学んだことに類似する多くの事を見学、体験し、今まで自分がぼんやりとしか

理解していなかった事への焦点が少しずつしぼられ、また、違うアイデアが生まれる、というように多面的に物事を見ることもできたのではないだろうか。

本学の建学の精神である「夢」は、未来への、目的と希望を抱くこと、また、「大慈大非」は、相手の立場に立って物事を考え行動することである。この研修でコミュニケーションが難しいという立場に立たされた「体験」は、「相手の立場に立って物事を考え行動する」ことを、教えてくれたのではないであろうか。研修での多くの体験は、感性に刺激を与え、大脳の働きを活性化し、更なる目的と希望へ、そして、「夢」とつながって行くと思われる。最後に、この研修での体験を通して得た、様々な「感動」がこの研修に参加した６人の学生達の「医療人」としての肥やしになる事、そして、今後も、本学が、このような海外研修への理解とサポートを継続していく事を心から願う。

［文献］

1. http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/12/_icsFiles/afieldfile/2010/12/22/1300642_1.pdf（海外留学状況、文部科学省）accessed:2014/03/03

2. http://www.mmjp.or.jp/rmc-jyosai//kokusai/kokusai-column-20120300.html（アメリカ合衆国におけるアジア人留学生の推移）accessed:2014/03/03

3. http://www.huffingtonpost.jp/2013/07/14/national_tertiary_students_enrolled_abroad_n_3595967.html accessed:2014/03/03

4. http://www.mmjp.or.jp/rmc-jyosai//kokusai/kokusai-column-20120300.html（コラム Global place より）accessed:2014/03/03

謝辞

近年、アメリカの医療施設の多くが、「感染コントロール」を理由に、外国人見学者の受け入れを強く規制する中、本学の海外研修目的を深く理解し、現地での「生」の臨床見学を快く引き受けてくださったフクジ＆ラム PT、ハワイ パシフィック病院、ハワイ ヒーリング アート カレッジの関係者の皆様に心からお礼を申し上げます。

ありがとうございました！